コロナ下の仕事人

安易な「抑制」避ける

認知症患者を介護する

医療法人社団　清山会（仙台市）

仙台市の医療法人社団「清山会」に1月上旬、緊張が走った。運営する介護老人保健施設で、職員1人が新型コロナウイルスに感染したことが分かった。その後、施設利用者1人も陽性が判明したが、専門医療機関に入院させることはできず、施設にとどまることになった。

本来「レッドゾーン」に隔離すべき濃厚接触者がいる施設内で、同時に感染者をケアする「レッド・イン・レッド」の状況下、山崎英樹理事長(60)にはどうしても避けたい事態があった。部屋を施錠したり、行動を物理的に制限したりする「抑制」だ。

清山会グループは認知症患者の介護施設などを宮城県内で計55カ所展開する。「抑制」の回避は開業以来の信条だ。ただ、感染者に対し、肺炎のリスクを高めるとされる向精神薬の投与を休止したことで、勝手に個室から出歩く恐れがあった。

他の利用者や職員の安全をどう守るか―。外部の当事者グループや家族会と話し合い、達した結論は「命は最優先だが、安易に抑制しない」。幸い感染者の症状は快方に向かい、感染拡大はなかったが、山崎理事長は「抑制の『よ』を口にした時点で敗北だ」と唇をかむ。

苦い経験を機に、法人は終末期の医療ケアを利用者や家族と話し合う「アドバンス・ケア・プランニング（ACP）」の導入を決めた。利用者の意志を事前に確認することで、緊急時の混乱やトラブルを防ぐ。

「ご飯おいしく食べられましたか」「顔色良いですね」

デイサービス「わかなの杜」（宮城野区）で、介護福祉士の菅原健さん(37)が利用者に声を掛ける。マスク越しでも大切なのはコミュニケーションだ。登録者約120人のうち6割が要介護者。1人暮らしの高齢者にとって、なくてはならない場になっている。

菅原さんは感染者が出た施設に派遣された応援職員の1人でもある。医療用ガウンを身に着けて汗だくになって働く中、終末期の利用者をみとった。「介護は命を預かる仕事」という危機感を新たにする出来事だった。薬や医療の知識を広げ、介護のスペシャリストを目指す。

山崎理事長も「非日常の中でも日常を大切にする」という介護の原点を見つめ直す。日々の食事や移ろいゆく景色を利用者と共に楽しむ。「自立生活を送れない方はすでに日常を奪われている。日常は権利。それを少しでも取り戻すのがわれわれの仕事だ」

＝随時掲載＝

デイサービスの利用者に声を掛ける菅原さん（左から2人目）
＝2月上旬、仙台市宮城野区